

主日礼拝説教「本当の事を見る」

日本基督教団石神井教会 2018年7月8日

【旧約聖書日課】列王記上 10章1～13節

¹シェバの女王は主の御名によるソロモンの名声を聞き、難問をもって彼を試そうとしてやって来た。²彼女は極めて大勢の随員を伴い、香料、非常に多くの金、宝石をらくだに積んでエルサレムに来た。ソロモンのところに来ると、彼女はあらかじめ考えておいたすべての質問を浴びせたが、³ソロモンはそのすべてに解答を与えた。王に分らない事、答えられない事は一つなかった。

⁴シェバの女王は、ソロモンの知恵と彼の建てた宮殿を目の当たりにし、⁵また食卓の料理、居並ぶ彼の家臣、丁重にもてなす給仕たちとその装い、献酌官、それに王が主の神殿でささげる焼き尽くす献げ物を見て、息も止まるような思いであった。

⁶女王は王に言った。

「わたしが国で、あなたの御事績とあなたのお知恵について聞いていたことは、本当のことでした。⁷わたしは、ここに来て、自分の目で見るまでは、そのことを信じてはいませんでした。しかし、わたしに知らされていたことはその半分にも及ばず、お知恵と富はうわさに聞いていたことをはるかに超えています。⁸あなたの臣民はなんと幸せなことでしょう。いつもあなたの前に立ってあなたのお知恵に接している家臣たちはなんと幸せなことでしょう。⁹あなたをイスラエルの王位につけることをお望みになったあなたの神、主はたたえられますように。主はとこしえにイスラエルを愛し、あなたを王とし、公正と正義を行わせられるからです。」

¹⁰彼女は金百二十キカル、非常に多くの香料、宝石を王に贈ったが、このシェバの女王がソロモン王に贈ったほど多くの香料は二度と入って来なかった。

¹¹また、オフィルから金を積んで来たヒラムの船団は、オフィルから極めて大量の白檀や宝石も運んで来た。¹²王はその白檀で主の神殿と王宮の欄干や、詠唱者のための竖琴や琴を作った。このように白檀がもたらされたことはなく、今日までだれもそのようなことを見た者はなかった。

¹³ソロモン王は、シェバの女王に対し、豊かに富んだ王にふさわしい贈り物をしたほかに、女王が願うものは何でも望みのままに与えた。こうして女王とその一行は故国に向かって帰って行った。

【使徒書日課】テモテへの手紙一 3章14～16節

¹⁴わたしは、間もなくあなたのところへ行きたいと思いながら、この手紙を書いています。¹⁵行くのが遅れる場合、神の家でどのように生活すべきかを知ってもらいたいです。神の家とは、真理の柱であり土台である生ける神の教会です。¹⁶信心の秘められた真理は確かに偉大です。すなわち、

キリストは肉において現れ、「霊」において義とされ、天使たちに見られ、異邦人の間で宣べ伝えられ、世界中で信じられ、栄光のうちに上げられた。

【福音書日課】マルコによる福音書 8章22～26節

²²一行はベトサイダに着いた。人々が一人の盲人をイエスのところに連れて来て、触れたいだけだと願った。²³イエスは盲人の手を取って、村の外に連れ出し、その目に唾をつけ、両手をその人の上に置いて、「何か見えるか」とお尋ねになった。²⁴すると、盲人は見えるようになって、言った。「人が見えます。木のようですが、歩いているのが分かります。」²⁵そこで、イエスがもう一度両手をその目に当てられると、よく見えてきて、いやされ、何でもはっきり見えるようになった。²⁶イエスは、「この村に入ってはいけない」と言って、その人を家に帰された。

連れて来る

大きなスポーツの祭典に心奪われている間に、見落としてきていたのでしょうか。立て続けに起こる大きな災害のニュースに心を痛める一方で、大きな事件の成り行きに心騒がせずにもいられない、という日々が重なりました。心整わぬまま日曜日の教会へとおいでになられた方も、少なくないのではないでしょうか。

わたしたちのこの世での歩みの中には、わたしたちが容易には答えを得られない出来事が起こるものです。自然の営みとしてもたらされる出来事もあれば、人の営みによってもたらされる出来事もありますが、それに直面した者が「なぜ」と問わずにいられない出来事がわたしたちの見る世界から無くなることはないのでしょうか。そして、その問いにうまく答えることができぬまま、悶々として過ごすしかないところに置かれることが、わたしたちには少なくないのです。

その問いに対する答えが、信仰によって得られることもあるでしょう。宗教の教えの中に一つの明確な答えを得られることを期待して、多くの人が信仰の道を訪ねます。わたしたちも同様でしょう。キリスト信仰によって、またその教えによって、この世の難問、不可思議に、答えを得たいと願っているのです。わたしたちの知恵ではわからぬ不可解な出来事の真の意味を、神から明らかにしていただきたいと、期待しているのです。

そのような願いや期待を心に抱いて教会においでくださる方が、いらっしやいます。けれども、期待したような答えを牧師の口から聞くことができずに幻滅して帰って行かれた方も、少なくないのではないでしょうか。

教会で聖書を説きあかし、信仰の言葉を語る働きに就かせられている者として、怖れを感じないではいられません。この世の中で起こっている出来事に対して、自分自身が十分に答えを得られていないとの思いのままでいるところでは、なおさらです。旧約日課が物語るソロモン王のように、どんな難問に対しても神から賜物として与えられた知恵によってすべて答えることができたならば、どれほど幸いか。どれほど多くの人の期待に応えられるか。その口から語られる知恵の言葉を聞きつけて多くの人が押し寄せてくるようになったならば、どれほど誇らしいことか。皆さんが家族や親しい者を誘って連れて来ずにいられないような言葉にいつも満ち溢れていたならば、どんなに良いことか。

ただし、ここに物語られるソロモン王は、その知恵と富の豊かさを誇った後に、神から離れたと、聖書は続く章で物語っています。人の知恵や富は、神からの賜物だとしても、人を神に結びつける保証にはならないのです。

皆さんは、教会にソロモンの知恵の言葉を聞きに来られているわけではないはずです。そうではなく、主イエスとお会いさせていただくために、教会においでになられている。誰かを誘うときも、ソロモンのような知恵に満ちた話を聞かせるためではなく、その人も主イエスにお会いいただけるようにと願って、お連れくださるのではないのでしょうか。わたしたちが二人または三人が集まるところにおいでくださるといふ主イエスのもとに、家族を誘い、親しい者をお連れしたいと、わたしたちは願っているはずなのです。

見えるようになる

今日、ここにおいでの方皆さんの中に、無理やり連れて来られたという方がいらっしゃるのでしょうか。子どもであれば、学校や親に強いられて教会に来る場合もあるかもしれません。大人であっても、付き合いや付き添いで、本意ではないけれども教会に来た、という場合がないわけではないでしょう。けれども、そういった方であっても、何ら差し支えないと思います。本当のところを言うと、わたしたちは皆、必ずしも確かな主体的な意思をもって、教会に来続けているわけではないからです。家族や仲間助けられ、励まされて、いわば何らかの形で連れて来られて、教会に来続けることができているにすぎない。

福音書日課の盲人は、自分の意志で主イエスのもとを訪ねた者ではありませんでした。人々に連れて来られたのです。周囲の人々の中に、「あいつも連れて行ってやろう」という者があったのでしょうか。もしかすると、「こいつも、あの評判のイエスに触れてもらったら、少しはまともになるんじゃないか」などと言う悪友に連れて来られたのかもしれませんが。いずれにしても、本人の主体的な意思によってではなく、周囲の人の思いによって、連れて来られたのです。

このようにして連れて来られた盲人が、主イエスによって癒されたという物語を聞くと、違和感を抱かれる方もあるかもしれません。主イエスは、「求めなさい。…あなたがたの天の父は、求める者に良いものをくださるに違いない」（同7:7、11）と教えられたことがありました。病気の癒しを願って近づいて来た女に「あなたの信仰があなたを救った」（マルコ 5:34）とおっしゃられたこともありました。ですから、わたしたちも、教会やキリスト教に関心を持ってくれない家族や友人を指して、「あの人は求めていないから」と、お連れするのをあきらめてしまうことがあるのです。信仰の道は、自分の中に悩みや葛藤があっても求める思いが無ければ、歩み始めることはできないと、どこかで考えているところがある。

そのように考えているとしたら、わたしたちは、今日、その考えをいったん捨てなければいけません。ただ周囲の人々の思惑で主イエスのもとに連れて来られた一人の盲人が確かに癒されたと、福音書には物語られているからです。いいえ、ただ癒されたというのではなく、主イエスに触れていただいて、見えるようになった、しかも「**何でもはっきり見えるようになった**」と物語られているのです。

彼は、「見えるようになりたいのです」と求めていたわけでもありませんでした。目の不自由な方の困難を、わたしは想像でしか知ることができませんので、軽々しいことは言えませんが、もしかすると、この物語の彼は、盲人ではあっても、周囲の人々、家族や友人に恵まれて、日常生活を送る上で、必ずしも困ってはいなかったのかもしれませんが。

その彼が周囲の人々に連れて行かれたところでお会いした方、主イエスにいただいたことは、ですから、単に肉眼の視力が回復した、というだけのことはなかったはずで、もっと大切なこと、もっと本質的なことを、見えるようにしていただいた。それが、彼の身に起こったことだったのではないのでしょうか。

キリストに触れていただくところ

主イエスは、その人に、幾度も触れられています。両手を、その人の上に置き、また更に、その目に当てられたのです。

すると、見えるようになった。**何でもはっきり見えるようになった。**

そのとき、この人の目に映っていたのは、人の姿でした。はじめは、ぼんやりと、です。「**人が見えます。木のようにですが、歩いているのが分かります**」。しかし、次にははっきりと見えるようになりました。歩いている人の姿が、分かるようになったのです。

人が周りにたくさん立ち歩いていたのでしょうか。そうかもしれません。けれども、それだけのことであれば、福音書は、わざわざ、この主イエスと盲人との短い会話を伝えるために記したりはしなかったでしょう。「何か見えるか」とお尋ねになられた主イエスは、この男が見えるようになるべきものが何なのかを、ご存じでいらしたはずです。主イエスには、見えるようになってほしいものが、あったのです。

「**人が見えます**」。それが、主イエスに触れていただいた者が見えるようになったものでした。いいえ、見えるようになってほしいと主イエスが願ってくださったものであった。そう、この福音書は告げているのです。

はじめは、その姿は「**木のよう**」に見えていました。しかし、それは、木ではない。人なのです。彼の前には、人がいるのです。人格のない、もしかすると一本ずつ区別することもない、ただ本数が数えられるだけの「木」。わたしは、ドキリとします。買い物に出かけたとき、電車に乗ったとき、わたしは、どれほどたくさんの「木」を眺めて過ごしているのでしょうか。周囲に立ち歩いているのは、「人」ではなく、「木」に過ぎない。その木々の間を、わたしはすり抜けていくのです。しかし、それは「木」ではない。「木」ではなく、「人」なのです。「人」が歩いているのです。それを、一人ひとりの「人」として見る目を、わたしは、開かずに過ごしていることが、なんと多いことか。

主イエスに触れていただいた人は、見えるようになったのです。「**人が見えます**」。はじめはぼんやりでしたが、次にははっきりと見えるようになった。何でも見えるようになった。わたしたちも、主イエスに触れていただかないわけにはいかないのです。「主よ、わたしの上に両手を置いてください、わたしの目に両手をお当てください。」

ところで、その最初に見えるようになった「人」の姿というのは、本当は、主イエスのお姿だったのではないのでしょうか。主イエスこそが「真の人」であるならば、わたしたちは、真っ先に主イエスのことをこそ見るようにされるべきでしょう。「真の人」を知り、わたしたち自身と隣人たちのあるべき「人」の姿を、はっきりと見るようになるべきなのです。主イエスは、そのような「人」の姿を、ここでお見せくださるのです。教会で、パウロが「神の家」つまり「神の家族」と呼んだ「生ける神の教会」でこそ、主イエスは、わたしたちの見るべき本当の「人」の姿を、お見せくださろうとしているのです。